紫西会報

第39号
発行所
茨城県筑西市下中山590
茨城県立下館第一高等学校
紫西同窓会
TEL (0296) 24-6344㈹
FAX (0296) 25-4673
編集兼発行責任者
野澤義男
印刷所　戸頃印刷所

ごあいさつ

紫西同窓会長　中山喜一郎（三十一回卒）

昨年米国のサブプライムローンに端を発した金融危機が全世界に広がり、百年に一度と云う未曾有の金融大恐慌は世界各国で倒産会社が続出して失業者の増大とパニック状態であります。この様な事がはたしてどの位続くものか、先の見えない時代です。円高、ドル、ユーロ安、輸出産業の落ち込みは、我が国の大企業も正に正念場です。でも百日も雨が降り続いた事はありません。必ずや晴れる日が訪れるものと確信しております。

今年の干支は丑年、牛のごとく一歩一歩をゆっくりでもいい、着実に地固めをしながら不況の時こそ、健全財政・健全社会の立て直しの絶好のチャンスとして捕え、日本人独特の粘り強さと高度の技術力で、地球に優しい物作りを発展する事が出来れば、最も望ましいと思います。

昨年私が前会長関根利康氏の後を引き継ぎ会長に就任して以来、各種会合に出席し感じた事を申し上げます。

昨年十一月下館紫西同窓会水戸支部総会に招待され一高の竹井校長先生と共に出席致しました。会場は水戸駅南に近くのレイクビューホテルで、参加者は四十数名でした。

司会役を勤めた相沢汎先輩より一高時代の想い出として、川又汎先生のお話がありました。名が互いに汎と云う事で良くかわいがって貰ったとの事。私も一年から三年まで、川又先生がクラス担任でお世話になりました。なかなか男気のある良い先生と思って居る一人です。そして山本英校長先生はじめ黒田先生、金戸、佐藤、石浜孫さん、各恩師達も今では鬼籍に入られクラス会を開いても招待する先生がいないとさびしいかぎりです。

年代の差はあれ同じ学校で三年間又は五年間青春時代に学ばれたと云う感覚は、八十五年の伝統のもと共有するものがあると思われます。

水戸会場出席者の中には私よりも十才以上も年長の諸先輩の溌剌とした様子にびっくり致しました。

元県庁職員の部長さん、県警関係では、警視正水戸署長、警察学校長、各地の警察署長等、常陽銀行本店営業部長、各支店長経験者、そして現役で水戸商工会議所、法人会及び各産業会で活躍して居る皆さんの、見識の高さと全身よりあふれ出る貫禄には圧倒されました。

下館を中心として、二十キロ圏内の範囲で暮らしてきた私は、井の中の蛙でびっくりする事ばかりでした。

古希を過ぎた私ですが、今からでも精進し追いつく努力を怠ってはいけないと痛感させられ良い勉強になりました。

水戸支部の益々の発展と皆様の御健勝を祈念し、私の挨拶を終わり、降壇しようとしましたら、司会者の相沢氏が「中山会長さんそのままちょっとお待ち下さい。」と。「下館一高紫西同窓会新会長さんにエールを送り度いと思います。皆さん御起立をお願い致します。」との事。突然の事で私もとまどいを感じながら、そのエールを無我夢中でお受け致しました。本当に心あたたまる事で感激致しました。

エールのお礼をのべ、その後和気あいあいの宴会に楽しい一ト時を過ごしました。水戸支部の皆さん本当にありがとうございました。

同窓会員の皆様が、政財界や教育関連をはじめ、全世界のあらゆる分野で活躍されている事は、誠に喜ばしいと思います。

最後に本年三月に卒業を迎える、二九四名の皆さん入会を歓迎すると共に、総数二四、六八六名となる同窓会員の皆様が、今後も健康で精進をかさね存分にご活躍される事を祈念いたしまして筆を置きます。

平成二十一年一月

悔恨と深謝と

校長 竹井 茂雄

鶯花の節となりました。紫西同窓会員の皆様には、ますますご清祥のこととお喜び申し上げます。

皆様には日頃から本校の教育活動に深いご理解と絶大なるご支援とを賜わりまして、誠にありがとうございます。衷心より御礼申し上げます。

一昨年四月の定期人事異動で、前校長・矢島英一氏の後任として、本校の第二七代校長を拝命いたし、爾来、二年間に亙り、皆様には熱きご鞭撻と心温まるご協力とを頂いてまいりました。縁あって、八〇年有余の歴史と伝統を誇る本校に奉職できることとなり、光栄に存ずると同時にその責任の重さに、身の引き締まる思いで微力を尽くしてまいりましたが、今春三月末日付けを以ちまして定年退職することとなりました。この間に頂戴いたしましたご鞭撻等に対しまして、厚く御礼申し上げる次第でございます。本当にありがとうございました。

平成一九年の六月二八日と七月二日という日は、私には忘れられない日となりました。六月二八日、長年に亙り会長として本会の発展にご尽力を賜わりました関根利康先生が亡くなられ、七月二日に告別式が執り行われたからであります。関根先生ご逝去との突然の報に接し、悲しみと驚きとを禁じ得ませんでした。この年の入学式には元気なお姿でお越しいただき、紫西同窓会長としての祝意と激励とを新入生に頂戴したばかりでありましたので、先生の悲報を俄には信じられなかったのであります。個人的にも以前から種々ご指導を賜わっておりましたし、人生の大先輩としてまだまだ多くをご教示頂けるものとばかり思っておりました矢先の訃音だっただけに、残念でなりません。先生のご冥福を心からご祈念申し上げる次第でございます。

いわゆる「ガリ勉」ではない、人間性豊かな「秀才」を世に送り出すことが、本校に課せられた使命であり、それはまた、生徒諸君自身の、保護者各位の、地域住民の皆さんの強い要望でもあると思量し、生徒諸君が自らの個性を発揮しながら自己の進路を考え、本校での生活を主体的に送ることで、将来の自己実現に向けて確実な基礎を築くことが出来るものと確信して、本校の運営に当たってまいった所存ではありますが、振り返ってみれば、徒に日数を重ねただけで、全てが不十分でありました。全教職員が常に意欲的に仕事に取り組めるよう、人的にも物的にも環境を整備し、学校運営に参画しているという当事者意識を持って、授業を展開し、学級運営に校務分掌の業務に部活動指導に当たれるよう、年度末には、各自の次年度への希望や要望に耳を傾けることに、「総務委員会」や職員会議では、それぞれの意見を可能な限り取り入れることに意を用いてきた、トップダウンを極力避けてきた、との密かな自負はありますが、随所に中途半端であった、という悔恨しか出てこないのであります。誰もが満足できる人事など、限りなく不可能に近いとは思いますが、もっといい学校運営があったのではないか、と思えて仕方がないのであります。が、全ての教職員と圧倒的多数の生徒が、全ての場面で、一丸となり大いに頑張って、それぞれの学校行事を成功に導いてくれたのであります。お陰で、この二年間を大過なく過ごせました。深謝申し上げる次第でございます。

第三学年における「選抜クラス」の在り方と進路指導の更なる充実とが課題である、と考えます。

学年進行で、昨年度の第一学年から「選抜クラス」制を採っておりますが、全ての生徒が積極的に意欲的に学習に取り組む体制としては、完成年度である来年度の第三学年におけるそれには、若干の工夫改善の余地がある、と思量するのであります。

「国公立大の合格者数」は、高校を評価する一つのバロメーターではありますが、それが唯一絶対の指標ではあり得ないのであります。生徒諸君のそれぞれの「第一志望」を如何に実現させるか、妥協することなくそれを如何に現実のものとしていくか、こそが、我々に課せられた、本校における進路指導での課題である、と考えるのであります。

生徒諸君の希望進路の実現に向けて、出来る限りの条件整備に専念し、本校の伝統をますます輝かしいものとすべく、本校の運営に当たってまいった所存ではありますが、元より浅学菲才の身でございますので、会員の皆様にご満足頂けるものとはなし得なかったことを幾重にもお詫び申し上げる次第でございます。

紫西同窓会員の皆様のご多幸と本校の更なる発展とを心からご祈念申し上げ、頂戴したご厚情に深謝申し上げまして、筆を擱きます。数々のご高配を本当にありがとうございました。

定時制の近況報告

定時制教頭　松本　正人
（五十二回卒）

本校の定時制課程は、終戦直後の昭和二十三年に開設され、今年度が開設六十年目となります。当初は、経済的に恵まれない中にも向学心に燃える勤労青年のためにあった定時制課程でしたが、急激な経済成長等、社会状況の変化に伴い、現在では就学の目的も多様化し、本校においても中学校時代に不登校を経験した生徒や全日制を中途退学した生徒たちが再出発をかけて入学してくるなど、様々な環境下の生徒達が日々勉学に励んでいます。

しかし、本校定時制課程は、茨城県高等学校再編整備計画対象校のため、平成二十三年三月をもって閉課程となります。したがって、平成二十年四月の入学生はありませんでした。

そのような中、平成二十年十二月現在、二年生以上に男子二十二名、女子一四名、計三十六名の生徒が在籍しています。年齢構成については、四月一日現在、十才代二十七名、二十才代四名、三十才代一名、六十才以上四名です。特に、六十才以上の男女各々二名の方々は、親子以上に年の離れた学友と、時には友となり時には人生の先輩として接してくださっております。向学心も高く、若い生徒たちにとってもこのような関係は今後の人生において貴重なものになることでしょう。

日常の学校生活は、夕方五時三十分からの第一時限目授業から始まります。続いて定時制ならではの給食後、二時限目以降四時限目まで授業が行われていますが、年間に履修する単位数は十九単位であり、他にホームルーム活動が週一時間実施されています。多くの生徒が仕事を抱えながら通学していますが、労働で疲れていても授業に積極的に参加している態度は立派です。また、水戸南高通信制との併修により、三年間で卒業を目指している生徒が三年生で二名、二年生で一名在籍しています。

さて、本校生徒の活動についてですが、まず、文化的活動について申し上げます。

すでに本校の伝統として定着している「俳句・短歌」に関する活動は、日頃から全日制文芸部と合同で行われていますが、八月に岩手県盛岡市で開催された「第三回全国高校生短歌大会（短歌甲子園２００８）」には三年連続で出場しました。また、同月愛媛県松山市で開催された「第十一回全国俳句大会（俳句甲子園）」にも八年連続の出場を果たしています。その他、「第十二回全国高校生創作コンテスト（國學院大學・高校生新聞社主催）」において、本校から多くの入賞者を輩出したことによる文部科学大臣賞受賞をはじめ、数多くのコンクールで入選・入賞を果たしました。

また、十一月に開催された「茨城県高等学校定時制通信制生徒生活体験発表大会」では、本校から出場した二名の内、四年生男子が「定時制を生きて」という題で発表し「茨城県議会議長賞」を受賞、同じく四年生女子が「私の定時制物語」という題で発表し「龍ヶ崎市長賞」を受賞しました。両名とも二十才代ということもあって、落ち着いた発表態度でした。

続いて体育・スポーツ活動について申し上げます。

六月に開催された県定時制通信制体育大会において、ソフトテニス女子が優勝、柔道男子個人が三位、バスケットボール男子が三位に入賞し、優勝したソフトテニス女子と柔道男子が本県代表選抜チームの一員として八月の全国大会に出場しました。その結果、両競技とも第五位入賞を果たしました。今後、本校の生徒数は減少していくため、来年度からは団体戦競技への出場が困難になることが想定されますが、個人戦競技への出場を中心に部活動を展開していきたいと考えております。

なお、本校定時制運動部は、十一月に開催された「茨城県高等学校体育連盟発足六十周年記念式典」において、過去十年間の顕著な活躍により、全日制運動部とともに、「優秀校」として表彰を受けました。

以上のように、充実した学校生活が繰り広げられている定時制ですが、三年後の閉課程を思うと寂しいかぎりです。しかし、生徒達は「自分たちが下館一高定時制の最後」という自覚を充分備えており、元気一杯、真剣に学校生活を送っております。そのような生徒達の志に報いることができるよう、教職員も一丸となって取り組んでいるところですので、今後も引き続きご支援をお願いいたします。

最後に、生徒の感性豊かな作品を紹介し、近況報告の結びとします。

「紅葉散る諸行無常の理に
　刃向かうような色変えぬ松」
（第十二回全国高校生創作コンテスト短歌部門優秀賞・本校が文部科学大臣賞受賞に貢献）定時制四年坂入一生君（十八才）の作品

同窓会便り

紫西同窓会水戸支部総会開催報告

支部長　大和田　實（三十一回卒）

学校より竹井茂雄校長、同窓会よりは中山喜一郎新会長のご臨席を頂き、各々懇篤なご挨拶を頂戴いたしました。特に中山会長には、前会長の関根利康氏の亡くなった経緯等が有り感嘆した。本年は、漸く振りに女子会員二名の出席が有り、会の雰囲気も和やかさが出た。

毎回、卒業年度毎の席次であるため、その席での会話が弾み、親睦が深まっていたのでは無いかと思われた。竹井校長は、各回の席を巡り、席の者と和やかに話が弾んでいたのが印象的でした。

この会も、今後は出席人員の増加を期し、親睦を深め、職に対する各自の感想の交換の場としての、有意義な場としての同窓会になる様に、発展していく事となれば幸いと思って居ります。

最後に、学校も創立八十五年となり、今後は、九十周年の記念行事等も有る事で、紫西同窓会共々益々の発展を心からお祈りいたします。

平成二十一年一月十九日記

以上

新任の先生方より メッセージ

「振り向くな、振り向くな、後ろには夢はない。」

高橋好文（四十二回卒）

標題は、茨城県の、とあるホテルの支配人からいただいた絵手紙の言葉である。

平成二十年三月三十一日定年を迎える。退職後も教壇に立つことを第二の人生、と夢を追うことを決意する。とはいえ、今までが「こうやれば…」「ああやれば…」「こうしておけば…」と思うことばかりの人生だっただけに、「我思う故に我悩める」の心境が今も続いている。

何度も、何度も転びそうになったとき、救いの手を差し伸べてくれた人が周りにいたことは、幸いであった。中でも、松下幸之助には感謝してもしきれないほど助けられたような気がする。

「自分には自分に与えられた道がある。天与の尊い道がある。どんな道かは知らないが、ほかの人には歩めない。自分だけしか歩めない、二度と歩めぬかけがえのないこの道。広いときもある。狭いときもある。登りもあれば下りもある。坦々としたときもあれば、かきわけかきわけ汗するときもある。

この道が果たしてよいのか悪いのか、思案にあまるときもあろう。慰めを求めたくなるときもあろう。しかし、所詮はこの道しかないのではないか。諦めろというのではない。いまたっているこの道。いま歩んでいるこの道。ともかくも、この道を休まず歩むことである。自分だけしか歩めない大事な道ではないか。自分だけに与えられている、かけがえのないこの道ではないか。他人の道に心を奪われ、思案にくれてたちすくんでいても、道は少しも開けない。

道を開くためには、まず歩まなければならない。心を定め懸命に歩まなければならない。それがたとえ遠い道のように思えても、休まず歩む姿からは、必ず新たな道が開けてくる。深い喜びも生まれてくる」と『道をひらく』の中で彼は語りかけてくれた。

思えば、自分にしかない生き方を探し求めようという強い願望が生まれたのも高校時代だ。

強い願望をもつためには、ありたい自分、なりたい自分になるために目標をもたなければと焦ったりもした。確かに目標を掲げると、自分にはどんな特質、能力や才能があるのか、日常のちょっとした行動、周りの人からのアドバイス、仲間などからの指摘に、ハッと感じとることができたりもした。目標がなければ、気がつかないままになってしまっていただろう。

その目標も何度となく修正が加えられた。目標と目の前の現実との差があまりにも

歴然としていたからだ。私心にとらわれず、ものごとをありのままに見て、正しい判断ができるようになるのはなんと難しいことか。私心がなければ、自分をかいかぶったり、他人のすすめを、自分に都合よく曲解して、これこそ自分の進むべく方向だと思いこんでしまうこともないだろうに。私利私欲に振り回されたのも高校時代だ。

高校時代には、外から改めて自分というものを見つめ直して見る必要があるような気がする。自分を客観的に見つめる必要がある。そうすると、今まで見えなかったものがほんの少しだけわかってくるような気がする。

しかし、実際には自分の心を外に置いて自分を見ることは、なかなか容易なことではない。友人に、訊いて見るのも一つの方法である。そうすれば、他人は自分よりよく見ているもので、核心を突いてくることが往々にしてある。決して腹を立てることなく、素直に受け入れて、自己変革の材料にするのもいいのではないだろうか。

過去にしがみつくことなく、自虐的になることなく、前を向いて一歩一歩踏み固めながら、自分の道を拓いて欲しい。「振り向くな、振り向くな、後ろには夢はない。」のだから……。

勉強するとは

須藤幸一（六十七回卒）

ドラえもんに、「人生やりなおし機」という話がある。小学四年生ののび太君が、頭の中はそのままで四歳に戻るという夢のような話である。四歳に戻ったのび太君は、自分の名前を漢字で書くことができ、ジャイアンやスネ夫を泣かしてしまう。それを見ていた天才教育界の人は、四歳になったばかりとは思えないと驚く。知能、体力が小学二年生程度はあると。パパもママもおばあちゃんも、東大は間違いなし、きっと大学者になると大喜びする。そんな時に、ドラえもんが迎えにくる。

ドラえもんは、このまま大人になるというのび太君に対し、「前よりも悪くなんだよ」といってタイムテレビでその後ののび太君の様子を見せる。テストが簡単すぎて勉強することがなかった小学校一年生、でも、小学四年生になるとテストでは0点をとり、ママに怒られるようになる。不思議がるのび太君に、ドラえもんは「勉強なんかした事がないから、勉強の仕方がどうやっていいかわからないからだ」と説明する。その後の様子を見るまでもなく、元に戻ってくるという話である。

学生時代、勉強はいつまですればいいのだろうと考えていた。大学に入学し、就職すれば終わりだと思っていた。でも、社会人になっても未だに勉強し続けている。結局、人間は一生勉強し続けなければならないという結論にたどり着く。学校で勉強している国語や数学ではないが、よりよく生きるためには、何かを学ばなくてはいけない。その学び方を、学生時代に勉強しているのだと思う。だからこそ、大学受験だけの勉強はしてほしくない。確かに必要な勉強だが、他にも学ばなくてはいけないことがたくさんあるはずである。

この学校でたくさんのことを経験し、学んで、人として大きく成長してほしい。そのような生徒に関われること、その成長が見てわかること、教員としてとてもうれしく思う。君たちが、私もがんばらなくてはいけないと奮い立たせてくれる。

でも、戻れるものなら高校生に戻って、やり直したい気持ちも少しある。それだけ高校時代は魅力的な時期なのである。

下館一高に赴任して

酒寄和記（六十九回卒）

下館一高に赴任して、まもなく一年が経とうとしています。

現在は第一学年の副担任をしながら、バレーボール部の顧問として日々邁進しています。下館一高在学時の私はというと、授業では稲見庄二元校長先生に数学を鍛えられ、部活動では門井了先生に弓道を通して礼儀と集中力を鍛えていただきました。そのような私が今や男子バレーボール部の監督を務めながら数学の教員をさせていただいていることに、なんとなく違和感を持つことがあります。というのも、私は今までに一つのことをとことん突き詰めてきたという経験がありません。子供の頃は剣道、水泳、ソフトボール、書道、絵画と数多くの習い事をしても何一つ様にならず、中学校で始めたサッカーは下館一高では続けず、かといって弓道部では全国大会に出場していた先輩方に囲まれながらもまともな結果は残せず（二段は門井先生のご指導で取得することはできましたが）、その弓道も大学では続けることはありませんでした。数学だけは極める努力をしてきたかというとそういうこともなく、大学は情報科に進学して数学教諭の免許を取得するという、なんとも邪道で中途半端な道を歩んで参りました。

そんな私も前任校では、ちょっとコンピュータが使えるからという理由でバレーボール専門部のホームページ作成などの仕事に携わるようになり、その関係から他校の先生方に練習試合や公式戦とお世話になり、資格もいくつか取得してバレーボールに十年近く関わってきました。何一つまともに続けてこなかった私に、やっとまともに続けていけるものが見つかりました。下館一高でもバレーボールに関われることになり、今後は下館一高バレーボール部の発展に微力ながら尽力していきたいと考えています。

また、下館一高に赴任して進学指導に関わることになったということは、私に数学教育を一からやりなおせという啓示なのだと思います。今はまだ経験も浅く手探りの状態ですが、生徒の自己実現のために尽力していきたいと思います。

ということで私、なんとも回り道をして下館一高に赴任することになりました。

意外に様々な経験をしてきたことが役に立つこともありますが、現役の下館一高生には王道を歩むことができるよう精進して参りますので、何卒よろしくお願いいたします。

下館一高に赴任して

助川裕子

下館一高に赴任して、もうすぐ一年になろうとしています。私にとっての初任校が、この下館一高だと知ったとき、なんて素晴らしい学校に赴任できるのだろうと心弾ませました。同時に、初任者である自分が、この学校にふさわしい授業をできるのかと大変不安にもなりました。そんな不安を抱えた私が、初めて本校の生徒に会ったのは、春休み、当時の生徒会の皆さんとの顔合わせでした。明るくこちらまで笑顔になってしまうほどのパワーを持った生徒会長さんを始め、春期休業中にも関わらず、生き生きと活動している生徒の皆さんを見て、このような生徒がいる学校に赴任できた喜びを改めて感じるとともに、責任の重さに身が引き締まる思いでした。

あれから、一年。振り返ると本当に日々の仕事に追われ、余裕なく過ごしてきてしまったように思います。そんな私がなんとかやってこられたのは、周囲の先生方の温かい励ましやご指導のおかげだったと改めて感謝しています。また何よりも、こんな私の授業でも、真剣に聴いてくれている生徒の皆さんがいてくれたからだと思います。私の高校時代は、勉強して当たり前、できて当たり前という環境の中で、息が詰まりそうなときもあったのですが、この学校の生徒の皆さんは、勉強するということを、明るく前向きにとらえている皆さんが多くて、本当に素晴らしいなと感心していました。辛くても頑張ったり、周りに優しかったり、自分に厳しかったり、そんな生徒さんを見ていると、本当に愛されて育ったのだなあと感じることが多くあります。いつもどこかで自分を心配していてくれる、そんな人がいる幸せ。誰かを大切に想う幸せ。その想いを力に変えていける幸せ。この学校の生徒さんを接していると、当たり前すぎて普段は気にも掛けていないことを、思い出させてくれる、そんな気がします。このような生徒の皆さんと過ごせる幸せに感謝しながら、少しずつでも成長できるよう努力し続けていきたいと思います。これからもどうぞ宜しくお願い申し上げます。

三度目の赴任

菱沼郁雄（三十二回卒）

下館一高には今回で三度目の赴任となります。教諭として昭和五十二年より十三年間、教頭として平成八年より二年間、そして今回講師として一年間教鞭を執ることができたことはこの上ない喜びであります。

生まれ育った家が近かったせいか、小学生の頃から校庭や旧体育館でよく遊ばせてもらいましたし、中学1年生の時には旧講堂を四教室に分けて仮住まいをし、高校生の時には風格あるL字型の校舎を学舎として通学した思い出深い母校です。

その母校で目にしたことは実にたくましい後輩の姿でした。グラウンドと体育館で部活動の練習に盛んに励む姿。教室で授業を熱心に聴く姿。そして図書室や時習館で食い入るように学ぶ姿。館力祭などの行事の自主的な行動。そして、元気のよいあいさつ。（あいさつをすることは当たり前のことですが、以前はよく出来なかったように記憶しています。）誠に頼もしい限りです。

そして、指導する先生方も頼もしい。教科指導はもちろんのこと、ホームルーム・道徳・部活動・進路指導・生徒指導等あらゆる分野で熱意ある教育活動を展開している姿を目の当たりにし、たくましい後輩を含め、実にすばらしい学校であることを実感しました。

『初心忘るべからず』

世阿弥の言葉です。「学び始めた当時の未熟さや経験をわすれてはならない。常に志した時の意気込みと謙虚さを持って事に当らねばならない。」（広辞苑）という意味です。この言葉を座右の銘にして、「初心」を思い起こして人生を歩んでいるつもりです。怠慢の心を持った時や困難な障害に当った時に初心に帰ることは大切なことです。何事にも初心を忘れず、前向きに考え、チャレンジの精神で人生を歩んで行きましょう。

伝えたいこと

遠藤晴美

初めまして。今年度から音楽を担当しております遠藤晴美と申します。ちょうど昨年の今頃だったでしょうか、校長先生から非常勤講師のお話を頂いた時は、学校名を聞き間違えたのではと思うほど驚きました。少しの迷いはありましたが、自分も勉強させて頂くつもりでお引き受けしました。最初に学校へ着た時の印象は、進学校でありながら部活動も盛んに行われており、生徒たちの表情が生き生きしていることでした。

高校生活をこのような環境の中で過ごせる皆さんは、本当に幸せだと思います。

さて、私には授業を通して伝えたいことがあります。少し大げさかもしれませんが〝音楽は生きる力を与えてくれる〟ということです。私はこれまで、社会に出てからも音楽活動を楽しむ方たちをたくさん見てきました。プロもアマチュアも関係なく、真剣に音楽を創り上げる喜びは、人とのつながりや自分の存在を実感させてくれます。生徒の皆さんが、素敵な音楽との出会いを見つけてくれたら嬉しく思います。